

「アレ」はなぜ人を動かしたのか

—阪神タイガース・岡田監督による「優勝」の言い換え—

金井 勇人ⁱ

KANAI Hayato

(要旨)

2023年の日本プロ野球では、阪神タイガースが18年ぶり6度目のリーグ優勝、38年ぶり2度目の日本一に輝いた。その間、岡田監督が「優勝」をアレと言い続けたことも大きな話題となり、アレは現代用語の基礎知識選2023 ユーキャン新語・流行語大賞年間大賞を受賞した。筆者はリーグ優勝の直後（日本一の直前）、NHK ラジオ番組「Nらじ」に電話出演、「アレ」はなぜ人を動かしたのか」というテーマにて話す機会を得たⁱⁱ。その際の基礎となった考え方を、本稿に記しておきたい。

キーワード：アレ、優勝、言い換え、ア系の指示詞、3つの「遊び」

1. はじめに

2023年の日本プロ野球において、阪神タイガースが18年ぶり6度目のリーグ優勝を果たし、続いて38年ぶり2度目の日本一を達成した。また、シーズン中に阪神タイガースを率いた岡田監督が「優勝」をアレと言い続けたことも大きな話題となったⁱⁱⁱ。

- (1) なかなか『アレ』にたどり着けない日々を送ってきたわけですが、このユニホームを着た以上は『アレ』に向かってキャンプからスタートしたい。(読売新聞オンライン 2023/02/04 15:00) ^{iv}
- (2) なかなか『優勝』にたどり着けない日々を送ってきたわけですが、このユニホームを着た以上は『優勝』に向かってキャンプからスタートしたい。(本稿の筆者がアレを「優勝」に置き換え)

なぜアレは、選手やファンの心を動かし、また多くの人々の注目を集めることができたのか。以下ではア系の指示詞（アレ・アノ・アソコなど、アで始まる指示詞）という観点から、この問いを考えていく。

2. 考察

「優勝」と言う代わりにアレと言うこと——「優勝」という概念を指示詞アレによって指すこと——は、岡田監督が意図したように「選手に意識をさせ過ぎないように（パフォーマンスの低下を回避）」という配慮が基本にあると考えられる。しかし同時に、ア系の指示詞の性質を上手く利用しているため、とても面白い表現効果が出ている。それが多くの人々の心を捉えた要因（の1つ）であるだろう。そこで本稿では、3つ

ⁱ 埼玉大学人文社会科学研究所/日本語教育センター教授

ⁱⁱ 2023/10/03, NHK ラジオ第1放送「Nらじ」, ニュースアップ「「アレ」はなぜ人を動かしたのか 日本語学者に聞いてみた!」にて。

ⁱⁱⁱ 元々は「岡田監督がオリックスの監督を務めていた2010年に、交流戦の優勝に近づくなかで、選手に意識をさせ過ぎないようにと、「アレ」ということばを使ったのが最初」である（Nらじキャスター眞下貴氏の御教示）。

^{iv} 最終閲覧日 2024/02/22, <https://www.yomiuri.co.jp/local/kansai/news/20230204-OYO1T50021/>

の「遊び」という側面から、アレの表現効果を考察する。その3つの「遊び」とは、

- ① 隠語として用いて仲間意識を醸成
- ② あたかも思い出せないかのような言い方
- ③ 過去を参照せざるを得ないような言い方

である。これらが相互に影響を及ぼし合い、1つの大きな表現効果に結実していったものと考えられる。

2-1 遊び① 隠語として用いて仲間意識を醸成

まず、最も基本的な表現効果として、いわゆる隠語としての機能が、選手とファンの仲間意識を醸成したことを挙げたい。そもそもア系の指示詞の機能は「記憶指示」と称される。すなわち、その指示対象は基本的に、話し手と聞き手の記憶内に存在する、いわば両者の「共有知識」である^v。

- (3) 太郎「昨日、喫茶店で食べたアレ、おいしかったね」
花子「そうね、アレ、また食べたいね」

(3)においてアレと言った直後の太郎は、その指示対象を花子が特定できると見込んでいるが、確信を持つには至っていない。しかし花子は次のターンで、自身もアレで指し直すことによって、指示対象を特定できたことをアピールしている。それを受けて初めて、太郎は自身の意図が達成されたことを知る。つまり、この一連のやりとりは、太郎と花子が「記憶の共有」を確かめ合うことでもある。

同様に、岡田監督が「優勝」をアレと言うとき、そしてそれに倣って選手やファンもまた「優勝」をアレと言うとき、その一連の行為は実は、監督－選手－ファンが「記憶の共有」を確かめ合っていることと同義である。そのような確認行為を通して、アレ使用者の間に仲間意識が醸成されていく。

ただし、アレの指示対象について、聞き手が特定に失敗することもあり得る。

- (4) 太郎「昨日、喫茶店で食べたアレ、おいしかったね」
花子「え、アレって何だっけ？」

(4)の花子は、指示対象の特定に失敗している。実は筆者は当初、岡田監督のアレをニュースの見出しなどで見たとき、何を指しているのか分からなかった（特定に失敗した!）。このようにアレが何を指しているのか分からない（筆者のような）人たちも、少なくなかったことだろう。

そうすると、阪神タイガースの選手やファンなどの「アレが何を指すのか分かる人たち」と、筆者のように「アレが何を指すのか分からない人たち」の間に、心理的な対立が出現する。この対立を受けて、監督－選手－ファンの仲間意識は、分からない人たちに対する言わば排他性を帯びていき、そのこと自体によってさらに仲間意識が強化されていく。これはまさに、隠語としての働きに他ならない。

^v 指示詞の用法は「現場指示」と「非現場指示（文脈指示）」に大きく二分される。ア系の場合、現場指示では、(a)のように空間的な遠距離にある対象を指す。

(a) 太郎「アレ、スカイツリーだよな？」 花子「そうね、ずいぶん遠くからも見えるのね」

一方、非現場指示では、(b)のように記憶内にある対象を指す。

(b) 太郎「昨日、喫茶店で食べたアレ、おいしかったね」 花子「そうね、アレ、また食べたいね」 (=3)

このとき、太郎と花子が同一の対象を特定していることから分かるように、ア系の指示詞は基本的に、話し手と聞き手の「共有知識」を指す。なお、非共有知識を指す例外的な用法（先日、〇〇ラーメンを食べただけど、アレ、本当に美味しかったなあ。今度、一緒に食べに行こうよ!）については、本稿では考察の対象外となる。

ただし、隠語とは本来、「隠しておかないと立場が悪くなること」に適用されるのが常である。例えば飲食店などで、ゴキブリを「太郎」と呼ぶようなケース（ゴキブリが出たことを客に知られてはマズい）などが挙げられるだろう（その代わり、店員同士の結束性は高まる）。しかし言うまでもなく、「優勝」という語は隠さねばならない「NGワード」ではなく、むしろ堂々と表に出し得る「HAPPYワード」とでも言えよう。「それなのになぜ隠すのだ（なぜ隠語化するのだ）!？」というおかしみ。ここに「遊び①」がある。

2-2 遊び② あたかも思い出せないかのような言い方

ア系の指示詞は共有知識を指す，ということを前節で見たが，それは隠語的な使用に限らない。ほかにも例えば，指示対象の概念は確かに記憶内に存在するのだが「その名前が思い出せない」ということは，往々にしてあり，そんなときにもア系の指示詞が活躍する。

(5) 夫：ねえ，アレ，どこにしまったっけ？

妻：あ，アレね，机の引き出しに入れといた。

この場面で夫が探しているものを，仮に「〇〇の割引券」であるとする。夫の記憶内には，その概念が確かに存在する。しかしその「〇〇の割引券」という名前を，夫は（妻も？）思い出すことができない。そうしたとき，ア系の指示詞を用いれば，(5)のように名前を思い出さなくても済むのである。

ただし，指示対象を妻が特定できなければ，先の(4)と同じく，夫の意図は達成されない。

(6) 夫：ねえ，アレ，どこにしまったっけ？

妻：え，アレって何？

いずれにしても夫にとっての「〇〇の割引券」とは，その当時において「常に頭の中に存在し続ける重要な存在」ではなかった。だからこそ，名前を思い出せなかったわけである。

一方，阪神タイガースにとっての「優勝」とは，そのような軽い存在ではない。監督－選手－ファンが常に意識し続けた，極めて重要な存在であった。ましてや先頭に立つ監督が「優勝」という語を失念するなどということは，全く以てあり得ない。そうした状況であることを自他ともに十分に了解していながら，わざと，あたかも思い出せないかのような言い方をするおかしみ。ここに「遊び②」がある。

2-3 遊び③ 過去を参照せざるを得ないような言い方

注Vの(a)で言及したように，ア系の指示詞は「空間的な遠距離」を指すが，この「遠距離」を指す性質は空間軸のみならず，時間軸においても機能する（非現場指示）。「時間的な遠距離」というのは，つまり過去を意味する（注Vの(b)におけるアレは，過去に属する指示対象が記憶内に存在している，ということ）。

過去は現在からアクセスできない。このアクセス不可能性が「遠距離」と感じられる要因となる。例えばいくら「あの日にかえりたい」と願っても，過去の「あの日」には，どうしても帰ることができない。そのアクセス不可能な感覚が「時間的な遠距離」である。

岡田監督のアレに当てはめてみると，近い未来に起こることが強く期待される「優勝」を，わざわざア系の指示詞によって「アクセス不可能な遠い過去に存在したもの」として指している，ということになる。

(7) なかなか『アレ』にたどり着けない日々を送ってきたわけですが，皆さん，アレ，覚えてますか？

(8) このユニホームを着た以上は『アレ』に向かってキャンプからスタートしたい。あ、アレというのは、その昔に経験した「優勝」のことです。

波線部は筆者が付加した文言であるが、このようにア系の指示詞を用いると、いちいち過去を参照せざるを得ない（ような気持ちにさせられる）。すなわち「遠い過去にはそういうこともあったよね、覚えてる?」といったニュアンスが、このアレには込められている。皆が一丸となって近い将来の目標としての「優勝」に向かうさなかに、つまり未来を見据えているさなかに、わざと、遠い過去を参照せざるを得ないような回りくどい言い方（しかもアクセス不可能では困る...）をするおかしみ。ここに「遊び③」がある。

3. おわりに

岡田監督が「優勝」をアレと言い換えた面白さ、それはア系の指示詞であることから（も）生じることを見た。これがもし指示詞ではなく、「太郎」などの名詞であったなら、隠語としての面白さは感じられたかもしれないが、もしかしたら「そこ止まり」の面白さであったかもしれない。

(9) なかなか『太郎』にたどり着けない日々を送ってきたわけですが、このユニホームを着た以上は『太郎』に向かってキャンプからスタートしたい。（太郎＝優勝）

また、同じ指示詞ではあっても、コレやソレであったなら、監督－選手－ファンの「記憶の共有」を確かめ合うものとはならないので、やはりアレほどには盛り上がらなかったかもしれない。

(10) なかなか {コレ/ソレ} にたどり着けない日々を送ってきたわけですが、このユニホームを着た以上は {コレ/ソレ} に向かってキャンプからスタートしたい。（コレ/ソレ＝優勝）

アレだからこそ、秘密を共有するようなワクワク感が生じてくる。その秘密の共有を許された仲間は、アレを解するすべての人、すなわち監督－選手－ファン（ことによっては野球ファン一般も）である。

のみならず本稿で考察してきたように、アレには遊び心が満載されている。優勝がかかった強い緊張状態にある選手やファンにとって、このような「遊び」は緊張の緩和に資するところ大であったろう。岡田監督の采配は、ことばの側面から見ても名采配であったと言える。

参考文献

- 金井勇人 (2021a) 「共感を喚起するア系の指示詞の使い方」石黒圭編『日本語文章チェック事典』pp.256-259, 東京堂出版
- 金井勇人 (2021b) 「「これ」「それ」「あれ」は、どんなふうに使分けられていますか」国立国語研究所編『日本語の大疑問－眠れなくなるほど面白いことばの世界－』pp.136-143, 幻冬舎新書
- 金井勇人 (2023) 「指示詞について (その1) 「この/あの」で臨場感や思い入れを」『ビジネス必携 伝わる文章の裏ワザ・表ワザ』pp.36-39, 経団連出版

謝辞

NHK エグゼクティブ・アナウンサーの眞下貴氏 (Nらじ・キャスター) には、本企画を筆者に持ちかけてくださった段階から、多岐にわたって有益な御助言をいただきました。記して、心からの謝意を表します。